

聖書：コリント人への手紙第一 14：26～33a

説教題：神は平和の神

日時：2023年1月8日（朝拝）

パウロはコリント教会の礼拝と関連して生じていた諸問題について、このところずっと語っていますが、12章以降はかなりのスペースを割いて御霊の賜物について語っています。中でも特に問題となっていたのは異言についてです。14章2節で見ましたように、異言は人に向かってではなく神に向かって語るもので、周りの人々には理解できない言葉でなされました。ですからそれは非常に神秘的なものでした。そのため人々はあのように話せる人こそ霊的な人、御霊の導きが豊かに与えられている人だと考えて熱狂的にこの賜物を求めたようです。礼拝はこの賜物を見せびらかす会場となり、大混乱が生じていました。そんな彼らにパウロは、理解できない言葉では聞く人々の成長につながらない。だから意味の分からない異言よりも、意味の分かる普通の言葉で話される預言の方がまさると述べて来ました。しかし問題は言葉が理解できないことだけではありませんでした。もう一つ、御霊の導きによるという名目で、それが礼拝の中で無秩序に行われていたことも問題でした。あちこちで異言の声が上がってコリント教会の礼拝は収拾がつかない状態になっていたようです。そこでパウロはこれまで述べて来たことを踏まえながら、秩序ある礼拝のためのガイドラインを今日の26節以降、この章終わりにかけて語って行きます。

そういう意味でここは当時のコリント教会の礼拝がどのように行われていたかを垣間見せてくれる部分となっています。しかしそのことは、どの町でもこれと全く同じように礼拝がなされなければならないということではありません。国や文化が異なれば礼拝の雰囲気も随分異なります。また聖書がまだ完結していない時代に特有の事情もここにあると考えられます。そのような側面も考慮しつつ、大切な原則を読み取って今日の私たちに適用することが大事であると思います。

さてパウロは26節で「それでは、兄弟たち、どうすればよいのでしょうか。あなたがたが集まる時には、それぞれが賛美したり、教えたり、啓示を告げたり、異言を話したり、解き明かしたりすることができます」と言います。ここは原文を直訳すると、「それぞれが賛美を持っています。教えを持っています。啓示を持っています。異言を持っています。解き明かしを持っています。」という表現になっています。これは12

章で見た通り、一人一人は御霊から分配された賜物を持っており、それぞれはその賜物を持ち寄って集まるということを述べているものと思われます。一人一人は単なる参加者、傍観者ではないのです。それぞれに与えられている賜物は豊かに用いられ、生かされるべきです。しかしコリント教会に見られたのは、その賜物をもつての自己主張、自己PRでした。彼らは互いに自分たちの賜物を比べ合い、それで競い合い、見下し合っていました。先ほどここは原文では、それぞれが「持っている」という表現になっていると申し上げましたが、ある人はここにはコリント教会員が互いに「私は賛美を持っている」「私は教えを持っている」「私は異言を持っている」という具合に、それで自らを誇示するような風潮があったことを暗示しているのではないかと思います。そんな彼らに 26 節後半でパウロは大切な原則を述べます。それは「そのすべてのことを、成長に役立てるためにしなさい」ということです。これはこれまで何度もパウロが強調して来たことです。私たちが常に心にかけるべきは他者の成長、教会共同体の祝福です。この成長という言葉は「家を建てる」という意味の言葉です。ですから他者を建て上げる、教会を建て上げることです。12 章 7 節でも、一人一人に御霊の賜物が分配されているのは「皆の益となるために」という目的の下にであると述べられていました。ですから私たちは自分に与えられている賜物をただ自分のために用いてはならないのです。他者の祝福、教会の建て上げのために与えられているのですから、その目的に沿って用いるよう努めることが大切なことです。

この基本原則の下で以下、異言と預言についてパウロは具体的なガイドラインを示します。まず最初は異言についてです。27～28 節には三つのガイドラインが示されています。一つ目は異言で語るのは二人か、多くても三人ということです。御霊の導きによるからと称して何人も礼拝や集会で異言を話す人たちがいたのでしょうか。しかしそれでは集会が延々と続きかねません。皆の益を考えて適切なのは二人、多くても三人までだとパウロは言います。二つ目に「順番に行い」とあります。このことからするとコリントで異言は同時にあちこちで、あるいは一斉になされていたのでしょうか。その光景は壮観だったかもしれませんが、話されていることは何も分かりません。単なる騒音、カオスです。ですからパウロは一人一人、順番に行え！と言います。そして三つ目に「一人が解き明かしをしなさい」。これまでも異言を語るなら解き明かしが必要であると言われて来ました。誰がこれをするのでしょうか。12 章 10 節の賜物のリストに「異言を解き明かす力」とありましたから、その賜物を持った人かもしれません。あるいは 14 章 13 節では「そういうわけで、異言で語る人は、それを解き明かす

ことができるように祈りなさい」と言われていましたから、異言を語った人本人ということもあり得るでしょう。その解き明かしがないなら教会では黙っていなさいとパウロは言います。それは周りの人々を建て上げることにはつながらないからです。家に帰って個人の礼拝でそれをするのは OK です。しかし皆の益を考えて適切でないことは教会の集まりではしない。

次に 29 節以降では預言に関するガイドラインをパウロは述べます。まず彼は預言する人たちについても「二人か三人が語り」と言います。これも時間が長くなり過ぎないためだと思われます。いくら理解できる言葉で話されるとしても適切な時間、皆の益を考えて常識的な時間というものがあります。次に「ほかの者たちはそれを吟味しなさい」と言います。この「ほかの者たち」とは誰のことでしょうか。預言しようと思って教会に来たのに、二人か三人の枠に入れずにあぶれてしまった人でしょうか。あるいは 12 章 10 節の賜物のリストで「預言」の後に「霊を見分ける力」とありましたから、その賜物を与えられている人でしょうか。あるいはテサロニケ人への手紙第一 5 章 20～21 節で、教会全体に対して「預言を軽んじてはいけません。ただし、すべてを吟味し、良いものはしっかり保ちなさい。」とされていることからして教会員全体、会衆全体と取るべきでしょうか。色々な意見があります。いずれにしろ大切な原則は、預言と称してなされるものを無批判に受け入れるべきではないということです。本当に神からのものかどうかを試し、吟味すべきであるということです。ヨハネの手紙第一 4 章 1 節：「愛する者たち、霊をすべて信じてはいけません。偽預言者がたくさん世に出て来たので、その霊が神からのものかどうか、吟味しなさい。」これはもちろん説教する人を見たら常に疑ってかかれ！とか、そのあら捜しをせよ！という意味ではありません。いつもそういう態度でいたら御言葉から益を受けることができなくなってしまいます。しかし私たちはその人の言っていることが本当に神からのものかどうか、特に聖書の他の主張と一致するか、聖書全体と合致するかどうかによって見抜く健全な判断力を持つべきであると言われていました。「サタンでさえ光の御使いに変装する」（コリント人への手紙第二 11 章 14 節）とされています。ですから語られた言葉を鵜呑みにせず、自らテストすること、識別することは大切なことです。

30 節には「別の人に啓示が与えられたら」とあります。これは当時に特有のことだったと考えられます。以前も触れた通り、このコリント書第一はパウロの初期の手紙であり、新約聖書のほとんどの文書はまだ存在していませんでした。そんな中、福音

のエッセンスであるキリストとその働きに焦点を当てて人々を励ましたり、慰めたりする直接的な啓示があったと考えられます。そしてここで考えられているのは一人が預言している内に別の人が聖霊に導かれて話そうとする場合の事です。一人ずつ語るべきであるならどうしたら良いのでしょうか。先に語っている人は「まだ私の話は終わっていない。聖霊によって私は語っているのだからあなたは待っていなさい」と後の人に言って自分の話を続けるべきでしょうか。あるいは後で啓示を与えられた人が、「今、私は聖霊によって話すように導かれているから黙っていられません。とにかく話します。」と言って割り込むべきでしょうか。これに対してパウロが示すガイドラインは「先に語っていた人は黙りなさい」ということです。これは聖霊によるからと言って一人が長時間、礼拝や集会を支配するのを防ぐという意味があると考えられます。すでにある程度の時間、その人は語って来たのですから次の人に譲るべきです。またここに愛の原則が適用されるべきであるということでもあるのでしょうか。他の人が語るべき言葉を持っていると言うなら、頑張らずに進んで相手に譲るのです。相手の人が語ることに耳を傾けるのです。もしその人の言っていることが御霊から出たものでないなら、やがて吟味され、退けられます。ですからまず相手に譲り、相手の語ることに耳を傾ける。そうすることによって一層の聖霊の導きを受けることが期待されます。31 節：「だれでも学び、だれでも励ましを受けられるように、だれでも一人ずつ預言することができるのです。」

続く 32 節は特に今、後の人に譲るようにと言われた人への言葉であると考えられます。「預言する者たちの霊は預言する者たちに従います。」 預言する者たちの霊とは聖霊のことであると考えられます。とすると聖霊は預言する者たちに従うという意味になります。ある人は、聖霊が預言する人に従うというのは順序が逆ではないかと思うかもしれません。預言する人が上なのかと。しかしそういうことを言っているのではないと思います。ポイントは御霊の導きを受けて預言する人は、なお自分自身をコントロールできるということです。「私は御霊の導きによってこれを語っているのだから、今、自分を止めることはできない」と主張することはできないということです。御霊に導かれている人は自分をコントロールできます。ガラテヤ書 5 章 22～23 節に記されている御霊の実に「自制」が出て来るように、聖霊に導かれている人は自分を制御できます。ですから聖霊に導かれて何かを語っている途中でも、状況を考えて適切な行動を取ることができます。他の人を考慮して他の人に譲ることができます。28 節でも、異言を語る人は解き明かす人がいなければ黙っていることができると言わ

れました。私は聖霊に導かれているのだから自分ではどうしようもないと言って、無理やり話を続けて、その場を混乱状態にするのが聖霊ではないということです。

そしてパウロは最後の 33 節前半で決定的な言葉として「神は平和の神である」と言います。ここは「というのは～だからである」という言葉が文頭に入っていますから、「というのは、神は混乱の神ではなく、平和の神だからです」というニュアンスになるでしょう。パウロが言いたいことは、本当に神に導かれている人は平和を生み出す人になるということです。ですからそれによって本当に神に導かれている人かどうかをチェックすることができるということにもなるでしょう。コリント人たちの礼拝や集会には混乱があり、ある種の無秩序が支配していました。コリント人たちは、それは聖霊によるのであって、かえってその混乱は聖霊の働きのしるしだとさえ考えていたのでしょう。今日もその線に沿って聖霊の働きを考える人たちがいるかもしれません。聖霊は異常な働きとして現れて、その結果、今あるものを壊す。引っ掻き回す。異言などの衝撃的な現れによって混乱をもたらす。それは聖霊のわざであると。しかしパウロは「神は混乱の神ではない。平和の神である」と言います。ですから本当に神の働きであるなら、そこに平和が現れなければならない！と。そのことからするとコリント教会におけるこの現状は聖霊に由来するとは言えないこととなります。もちろん彼らは聖霊の賜物をいただいていた。しかし彼らはそれをもってナルシズムに陥っていた。自己顕示欲によってそれをを用いていた。それで他者と自分を比較して争い、互いに見下し合っていた。また皆の益を考えて振る舞うという考えがなかった。その結果としての混乱であったということになります。それは神に由来する混乱ではなく、彼らの悪に由来する混乱です。彼らは「神は平和の神である」という神のご性質に照らして、もう一度自らを検討しなければならないということになるのです。同じことはヤコブの手紙 3 章 14～18 節にも記されています。3 章 16～17 節：「ねたみや利己的な思いのあるところには、秩序の乱れや、あらゆる邪悪な行いがあるからです。しかし、上からの知恵は、まず第一に清いものです。それから、平和で、優しく、協調性があり、あわれみと良い実に満ち、偏見がなく、偽善もありません。」 16 節に秩序の乱れはねたみや利己的な思いから発生すると言われています。さらに遡って 15 節では、そのような知恵は地上のもの、肉体的なもの、悪魔的なものとさえ言われています。一方、上からの知恵は反対に平和とか優しさとか協調性という特徴を持つと言われています。これは神ご自身がそういう方であることに基づく当然のしるしと言えます。

私たちもこの真理の下で自分自身を確かめたいと思います。御霊に導かれている人とは、ともすると自由奔放、気ままで、何ものにも束縛されず、秩序などとは縁遠いものところかと思っていることはないでしょうか。多少羽目を外したり、衝撃なことをしたり、今あるものを引っ掻き回すことが聖霊の働きだと勘違いしていることはないでしょうか。パウロはそうではないと言っています。御霊に導かれている人は自分をコントロールできる人、自己制御できる人です。そしてそのように自分を制御するのは他者への愛に生きるためです。皆が益を受けることを優先して生きるためです。そういう人こそ教会の成長のために仕える人であり、平和である神ご自身を映し出す人だと言われています。この光の下で今一度自分と自分の振る舞いを検討する者とさせられたいと思います。願わくは御霊に導かれている人としての歩みをささげる者でありますように。私たち教会の礼拝や集まりにおいて平和の神のご性質が豊かに現わされて、私たち自身が神による真の平和を益々喜び楽しみ、またこの祝福へと周りの方々を招く歩みをささげる者へ導かれたいと思います。